



巻 頭 言

2000年に臨んで

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事
塩野義製薬株式会社植物薬品開発部長

山中一寛

半年程前、偶然見たテレビ番組が忘れられない。それは、一般視聴者から公募したストーリーを短編漫画にしたもので、内容は次の通りであった。

2000年に一度、全能の神が降臨し、地球上で最も多い願いをひとつ叶えることができる。

「伝染病の撲滅」「飢餓からの救済」「紛争の終結」「新しいエネルギーの提供」など、様々な願いが出された。国連などで全人類共通の願いとして統一が試みられたが、自国の事情が優先し、纏らない。そのうち、意見の対立した国の間で戦争が始まった。全人類共通の願いを模索したことが、かえって全人類の願いを踏みにじるという結果を招いてしまった。そんな混乱の中、ある先進国大統領が気付く、「人類それぞれが勝手な願いを持つから対立し、戦争が起こる。勝手な願いを持たなければ、対立も戦争も起こらず、平和を維持できる。全人類共通の願いとしてそれぞれが勝手な願いを持たないということをお願いしよう」と。この大統領の提案は人々の反省を促し、全人類共通の願いとして採択された。いよいよ、神が降臨し、大統領は「全人類共通の願いとしてそれぞれが勝手な願いを持たないこと。」を願った。

願いは叶えられる筈だった。しかし、神はこう答えた。「私は、地球上で最も多い願いをひとつだけ叶えると言った。地球上の全ての生物の願いを聞いた結果、最も多い要望は、地球上から人間がいなくなって欲しいというものであった。彼らはこう言った。『人間は自然を破壊・侵略し、環境を汚し、生き物の生命を奪い、地球を破壊へと導いている。地球上から人間がいなくなれば、地球も地球上の生物も守られる。』と。私は、最も多い願いをひとつだけ叶えると

いう約束に基づいて、全人類をこの地球上から抹殺することとした。」。神の沙汰により、人類は一瞬に消え、宇宙から見た美しい青い地球がラストシーンであった。最後のどんでん返しは在りきたりでもあり、ましてやマンガ番組などと笑われそうだが、考えさせられた番組であった。

確かに、この地球上で人間は最も侵略的で破壊的であろう。他の生物に受け入れられることは不可能とも思える。地球資源を飽食し、廃棄物を排出した結果、資源の枯渇、環境破壊を生み出したばかりでなく、自らの生命を危険に曝してきた。しかし、四半世紀前に比べれば、地球資源の危機問題、人体を含む生態系への影響等環境問題への取り組みは全産業分野を通じてますます行われるようになってきた。容器包装リサイクル法に基づき、分別回収、再商品化により資源の無駄な消費を抑えようとしている。農業分野でも、環境負荷が小さいという特性は、薬剤あるいは使用方法を考える上で極めて重要な要素であることは、農薬事業に関係する人なら誰でも認識し、その判断に立っている。過去、地球環境に対し加害者となっていた人々も、今では、地球環境を保全するために何かをしなければ、人間こそがそれをしなければという自覚を持って行動するようになってきている。人類が地球から奪ったものを全部返すことは不可能でも、これ以上の崩壊は止めることができる。謙虚な気持ちになって、人類自らが地球環境を保全する努力をしない限り、環境破壊者の烙印は消えないし、地球上の他の生物との調和もできないような、そんなことを教えられた一番組であったように思う。